

第10部会

「實相研究會」として社団法人格を取得し、非宗教団体ではあるが運動は合法化された。成立大会には三百人が集まった。誌友会は、この時期以降急増する。同年、地方講師が二人誕生しているが、彼らは全て日本語リテラシーを有する高学歴層であった。一九八五年に機関誌は『生長之家』誌(白話文)に一本化される(当初の発行部数は二千部)。一方、八〇年代以降、千華・商鼎文化という教団とは無関係の出版社が、海賊出版で翻訳書を公刊し始める。一九九二年に宗教団体「生長之家傳道協會」として認可を受け、現在の組織体制が確立し、公領域における布教が解禁される。また、日本人の教化総長が赴任し、日本本部からの梃子入れが本格化する。九〇年代後半には地方講師が約一五〇人増産され、聖使命会員は当初の約一四〇〇人から漸増を続けている。しかし、この間、リーダー層の世代交代が進み、十分な日本語リテラシーをもたない低学歴の地方講師が有資格者の約九割を占めるに至る。彼らは、十分な翻訳・通訳作業を遂行することができず、休眠状態に陥る人々も発生する。また、相対的に社会関係資本が脆弱で、御利益信仰が強く、手段的なコミットメントに留まる傾向がある。台湾生長の家は、九〇年代以降、日本語リテラシーを有する層↓もたない層、高学歴層↓低学歴層への受容層のシフトが急速に進んでおり、同時期に急成長を遂げた日系新宗教と比較した際、教勢拡大が鈍化している現状が見られる。以上の受容層の変遷には、台湾社会全般における日本語リテラシーの低下という構造的要因と並んで、日本本部の北京語化志向への古参エリート層の不適応、台湾人の間における対日観の世代間ギャップと連動した

宗教的ニーズの複層性、当地特有の「私塾―学友型」の活動形態に惹起された放任的な育成システム等といった要因が介在している。

教団変革期における体験談の変容

——世界救世教を事例として——

武井 順介

新宗教において信者の奇跡体験(体験談)やそれを他者に伝達する「体験談発表」は、信者の信仰の強化に重要な役割を果たす。この体験談や体験談発表には、報告する体験談をまとめる過程において、自らの信仰を強化し、体験談発表を聞く(見る)信者は、他者の体験談に共感し、その体験談を通して自らの体験を構築する、という役割がある。

本報告の事例である世界救世教いづのめ教団(以下救世教)でも同様に体験談(体験談発表)は重要な意味を持っているようにみえる。例えば、各浄霊センターや聖地(静岡県熱海市)での勉強会や大祭などで体験談発表が行なわれ、それらにもとづき浄霊センター長や理事長、そして教主が信仰の重要性について体験談を解釈するなかで主張する。またこの主張のなかには、そのときの教団の教化・布教戦略が織り込まれることが多い。そこで本報告では、変革期の救世教の体験談を分析し、変革期の教化・布教戦略や体験談の特徴を捉えたい。

救世教の体験談は「病」に関する内容が多い。これは、救世教の「浄霊」という病氣治しの技法を中心的儀礼にしているためである。この「病」に着目し、体験談を分類すると三類型を析出できる。それが「病―近代医療―回復せず―浄霊―回復」(医療懷疑型一)、「病―近代医療―浄霊―回復」(医療懷疑型二)、「病―浄霊―回復」(浄霊型)であるが、これに属さないものもある(その他)。

さらに二〇〇六年から教義に新たな要素を加えた。それが「想念の実践」と「感謝の想念の実践」(以下「新たな実践」)であり、これを救世教の「変革」とみることができ。 「新たな実践」の内容を要約すると「感謝する」、「先祖・祖先とのつながりを意識する」、「神の分霊であることを意識する」となる。

このような変革のなかで救世教の体験談はどのように変容したのであろうか。第一に指摘できる変化は、「病」の意味内容の変化である。この変化にともない従来の病因観と救済観(現在的、個人的なもの)に過去の(過去との連続性)、共同的な要素が加わり、体験談に反映された。次に体験談に登場する言葉にも変化がみられた。信者向け機関紙・雑誌には二〇〇六年から「新たな実践」にかかわる用語が登場し、そこに掲載されている体験談のなかにも登場する。一般向けの機関紙では現在までこの用語が登場することはない。しかし、直接的に「新たな実践」に関わる用語を使っていないが、体験談で語られている言葉の背後に「新たな実践」観を垣間みることができる。その代わり信者向けの機関紙・雑誌では、従来は中心であっ

た浄霊に関する事項が若干影を潜めるようになった。

これらの結果、前述した体験談の類型にも若干の変化がみられた。それは「新たな実践」の要素が加わったのである。例えば、医療懷疑型一の「病―近代医療―回復せず―浄霊―回復」が「病―近代医療―回復せず―浄霊＋「想念の実践」―回復」になった。ただし、この変化は極わずかであり、体験談のベース(語りの形式)には変化がなかった。

ここから救世教の信者の教化、一般への布教戦略を読み取ると信者へは浄霊をベースとした「新たな実践」観の獲得を、一般へは浄霊による病氣治しと間接的「新たな実践」観の獲得を掲げているといえよう。